

儲けたが」とあるが、信英は二代藩主信枚と側室法蓮院との間に生まれており、満天姫が信英の嫡母となったことによる、本田氏の勘違いであろう。

七八頁に「信明の養母妙詮院の姪に当たる」とあるのは、「貞寿院」の間違いである。七代藩主信寧の正室章姫（貞寿院）は川越藩主松平明矩の娘、八代藩主信明の正室喜佐姫（瑤池院）も川越藩主松平朝矩の娘で、叔母と姪の間柄になる。信明は信寧の側室歌木（妙詮院）の子であり、世継ぎとなった時点で、正室貞寿院の養いとなったのである。一二二頁に石場家住宅（重要文化財）を「江戸中期に建てられたもので、のち現在地に移転した」とあるが、どこから移転したのか記述がない。石場家は移転して現在地に建て直されたものだろうか。

一七三頁に「表口四〇〇間、奥行一五〇間の建物」が、八月中にできなかった」とあるが、これは『松前詰合日記』の読み間違いであろう。文化四年（一八〇七）のエトロフ事件により弘前藩が蝦夷地警備のため、北海道斜里町で越冬し多数の死者を出したことは有名である。このとき三六坪の上長屋、三〇坪の中長屋と下長屋などを建てている。「表口四〇〇間、奥行一五〇間」はこれらの建物を建てた敷地の広さである。細かいところでいくつかが勘違いや間違いはあるものの、本書は「弘前藩」を学ぶテキストとして多くの人々に読んで頂きたい書であると思う。評者の方にも勘違いや間違いがあるかもしれない。ご寛恕を願えれば幸いである。

（A5判、現代書館出版、二〇〇八年七月刊、一六〇〇円＋税）
（ふくい・としたか 青森県立弘前南高等学校教諭）

八戸市史編纂委員会編

『新編八戸市史 近現代資料編Ⅱ』

竹村 俊哉

本書は、近代化の基盤作りがおこなわれた明治期における八戸地域のくらしや生活、地域産業、政治、社会資本、教育等の分野の諸様相を紹介した『新編八戸市史近現代資料編Ⅰ』（二〇〇七年）の続編で、明治末期から昭和初期にかけての八戸地域に関わる史資料を収録したものである。本書の構成は以下の通りである。

第一章 大正期の生活

概説 凶作と大火、二大災難をたくましく乗り越える

第一節 凶作

第二節 八戸大火

第三節 人々の生活の変化

第四節 祭りと観光振興

トピックス 八戸大火と人々／松友会誌から見る大火の復興

第二章 文化の興隆と実業教育の進展

概説 北方日本の小さな町で生まれた独創的な雑誌『東北実業評論』と社会教育

第一節 明治から大正への文化活動の動き

第二節 教育の拡充

トピックス 丸山董が口火を切った新教育運動のひろがり

第三章 港湾整備と政治

概説 港湾修築工事への助成を求めて―利益誘導と政党勢力の変遷

第一節 漁港修築運動と鮫港概況

第二節 八戸地域の政治

トピックス 「積極政策」と南部地方

第四章 鯨騒擾事件と漁業

概説 沿岸漁場の利用と道東漁場への進出、引続く北方への出稼ぎ、

捕鯨と沿岸漁業の軋轢「鯨騒擾事件」の発生

第一節 鯨騒擾事件

第二節 近代漁業の萌芽

第三節 北方への漁業出稼ぎ

トピックス 神田家日記に見る海と八戸

第五章 工業勃興のさきがけ

概説 農産・馬産が中心だった八戸に、近代工業化のさきがけとし

て「日出セメント」(のちの「磐城セメント」)がやってきた

第一節 農業・馬産

第二節 商業

第三節 金融業の展開

第四節 電力の供給と工業の近代化

トピックス 八戸地域の銀行設立と八戸銀行の誕生

第六章 まちづくりと八戸市誕生

概説 八戸らしいまちづくりへの歩み―浜通りと城下町の連携プレ

第一節 街の整備

第二節 八戸町および周辺町村の行政運営

第三節 八戸市誕生

トピックス 夢に終わった路面電車

目次を見てわかるとおり、この時期の八戸地域のあゆみが一目瞭然として理解できる、よく練られた編目構成である。それは、「ここにあるものを評価し、ターゲットを掲げよ―産業基盤の礎を築く」と題した本書の概要に、編集のねらいが明示されていることからもうなずける。

大正期における青森県を概観すれば、大正二年(一九一三)には北海道や東北地方を襲った大凶作により大打撃を受けたが、大正六年頃には第一次世界大戦(一九一四―一九一八)による好況の影響が青森県にもあらわれはじめた。しかし大正九年以降はこの大戦景気の戦後不況に見舞われるのである。これに加えて八戸地域においては、明治四十四年(一九一一)の鯨会社焼き打ち事件、大正十三年の八戸大火、大正十四年の小中野大火等、社会的大事件や大きな災害がおり、まさに激動の時代であった。巻頭の「概要」では、「このような極端な動きは、八戸地域の人々に近代資本主義の本格的な到来という、「時代の変化」と八戸地域の人々―地域リーダーたちだけでなく―に、「生活と地域を活性化させるターゲットは何か」を意識させた」と述べ、「ここにあるものを生かす」、すなわち人的資源や自然資源といった地域資源を、港という社会資本を地域活性の基盤に据えながら活用していく様子を本書は描い

ているのである。そして「これらは政党の選挙対策などで政府が提起した政略・東北振興政策の具体化の一つに沿うものであったが、八戸地域ではのちに「海が拓ければ、やがて陸が拓ける」とキャッチコピー化されて伝承され、八戸地域のまちづくり思想の一つとなる」と説いている。

「第一章大正期の生活」は、農業凶作と八戸大火に関する資料を取り上げ、その対応は「安定した現金収入の確保をめざす産業構造の変化や、中心街の住民の構成を変化させる等」、人々の生活に変化をもたらした様子を紹介している。

「第二章文化の興隆と実業教育の進展」は、まず明治期から大正期にかけて盛んになった「郷土紹介・案内」を目的に出版された書籍や、続々と誕生した文芸結社が発行した文芸誌を紹介している。なかでも総合雑誌『東北実業評論』は「八戸や日本文化への風刺を八戸から試みるが、そのタイトルは「八戸」ではなく、「東北」であり、しかも「文化」ではなく「実業」というもの」であり、独自の雑誌として取り上げられている。続いて学校教育及び社会教育の拡充に関する資料を紹介している。

「第三章港湾整備と政治」では、青森築港や岩木川改修工事と並んで大正期における青森県の三大事業の一つである鮫漁港修築工事を取り上げ、着工の実現をめぐるの当地における政党勢力の変遷について紹介している。なお、鮫港は昭和四年の市制施行を機に八戸港と改称された。

「第四章鯨騒擾事件と漁業」では、従来からの沿岸漁業と漁業資本による近代捕鯨との軋轢から生じた「鯨騒擾事件」を紹介し、さらに北海道・道東沖に出漁する漁獲効率を向上させた改良揚繰網漁業の集団と生産性が低い沿岸漁業に従事する集団の存在を取り上げ、後者が北海道へ

の漁業出稼ぎの主体であったことを紹介している。

「第五章工業勃興のさきがけ」では、八戸が近代的な工業地帯となる以前の当地域における農産・馬産、商業、金融、電気・製氷等に関する資料を取り上げるとともに、大正二年の大凶作への対応として東北振興策が練られ、その成果として近代工業化のさきがけとしての日出セメント会社が誘致実現に触れている。

「第六章まちづくりと八戸市誕生」では、まず明治二十四年の東北線開通やその三年後の尻内―八戸間の支線開通によって、鉄道に対する市民の関心が高まり、市民の交通機関として定着していく様子が紹介されている。さらに、県下初の定期乗合自動車の運行や鮫の築港事業の着手などのインフラ整備が進められていくなかで、商業港を抱える港湾都市を目指すべく、城下町八戸町と浜通りの小中野町・湊町・鮫村が合併し市制実現に至るまでの紆余曲折を示す資料を取り上げている。

以上、本書の内容を概観したが、評者は青森県における実業教育のありゆきを研究テーマの一つにしているので第二章はとりわけ興味深かった。青森県において実業教育普及の必要性が叫ばれたのは、東奥日報紙の一連の社説に見られたように、東北線開通がきっかけであった。当時の青森県の中等教育政策の重点は中学校の整備・充実であったが、学理の講義中心で、実生活に役立つ知識を得られないことから、県民の期待にそぐわず、さらに多数の中途退学者の存在という問題があった。これらを解決するため、実業教育令が公布された明治三十二年頃から、県の中等教育政策も、その重点を実業教育の整備に移っていったのである。

明治後期における青森県の実業学校としては青森農学校（明治三十

一年創立)、青森市立商業学校(明治三十五年創立)、北津軽郡立農学校(明治三十五年創立)、青森県立工業学校(明治四十三年創立)があった。八戸地域においては明治三十年に現在の県立八戸商業高等学校の母体となる三戸郡八戸実業補習学校が創立した。また、明治三十三年には現在の県立八戸水産高等学校の母体となる湊村立水産補習学校が開校した。こうして実業教育機関が拡充するなかで、本書に掲載された大正十三年の「八戸町立工業学校廃止の経緯」に関する資料は、政府当局の方針と地域の実情との齟齬を示すものとして大変興味深い。すなわち、大正六年にそれまでの八戸町立工業徒弟学校を母体として開校した八戸町立工業学校が、商業地としての八戸地域にふさわしくなく、また八戸町以外の地域からの入学志願者数のほうが多く、さらに尋常小学校の新築・改築費が必要なことから廃止認可を申請した。これに対し文部省実業学務局からは、①町立実業補習学校への改変、②既存の男子の町立商業補習学校と町立工業補習学校を併合し、これに女子部を増設する、という処分案を提示しその存続を促したが、結局大正十三年の卒業生をもって廃校となったのであった。

本書の特色として、章ごとの末尾に「トピックス」が掲載され、読者に対して章のテーマについてより関心を持たせる工夫がなされている。また、前巻同様、付録として各章の概説、本文、トピックスをPDF形式のデータで収録したCD-ROMが付けられ読者の利用の便に供している。

評者は、教員生活を八戸の地で歩み始めたことから、八戸市史の編纂事業にはひとかたならず関心を寄せてきた。小稿を書く機会をいただ

たことに感謝するとともに、評者の非力による誤読で、本書の真意を曲解した恐れもあるので、著者及び読者に対して深くお詫びしたい。

(B5判、四五六頁、八戸市、二〇〇八年、五六〇〇円)
(たけむら・としや 青森県立郷土館学芸課主任学芸主査)